

水疱性角膜症で新治療法

徳大病院、四国初

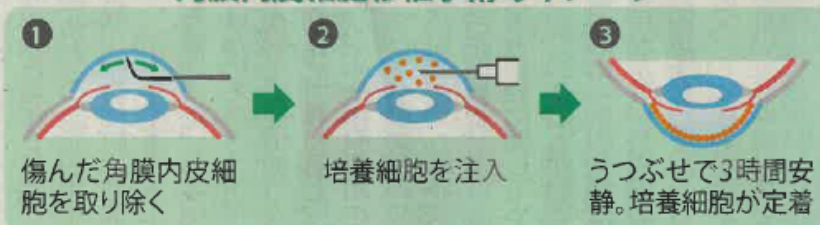
徳島大学病院は、角膜の透明性を保つ角膜内皮が傷んで視力が低下する「水疱性角膜症」の新たな治療法として、培養した角膜内皮細胞を移植する手術を四国で初めて導入した。8月に1例目の患者に実施し、経過は順調という。

水疱性角膜症は、角膜にたまった余分な水分を排出できなくなり、角膜が濁る病気。角膜内皮細胞は加齢や目の手術、コンタクトレンズの使用などで徐々に減り、体内で再生しない。細胞数が一定数を下回ると白濁し、進行すると失明する恐れがある。

これまでの治療法は、亡くなったドナーから角膜の提供を受けて入れ替える移植手術などがあつた。ただ、他の臓器と同様に角膜もドナー不足が課題となつてお

培養細胞移植 患者負担少なく

角膜内皮細胞移植手術のイメージ



り、角膜移植そのものに抵抗感を抱く患者も少なくなっていくという。

新しい治療法は、米国から輸入した角膜を使い、内皮細胞を培養して増やす。

傷んだ内皮細胞の組織を取り除き、培養細胞を注射器で注入する。細胞が定着するまで約3時間うつぶせになる必要があるが、30分程度の処置で終わるため比較的患者の負担が少ない。

高齢者に多い白内障は角膜内皮細胞が少ないと手術ができない。新しい治療法で内皮細胞を回復させることで、白内障の手術が受けられるようになる。

2023年に公的医療保険が適用された。導入初年度は実施できる患者が1人に限られ、徳島大学病院では27年4月ごろから実施件数を増やせる見込み。

治療を担当する同病院眼科の南佳佑助教は「角膜移植をためらっていた患者さんに新たな選択肢を提供できるようになった。新しい治療法を周知し、症例を重ねていきたい」と話している。

(山口和也)